# 徳島を元気にするために、地域の課題に本気で向き合う

徳島県徳島市　特定非営利活動法人 眉山大学（びざん大学）

**少子高齢化が進行するなか、都市への人口集中や地方の過疎化の問題を背景に、生涯学習や自己啓発、地域の活性化などを目的とした講座を開催する「市民大学」が各地で組織されている。2011年に発足した「びざん大学」も、そうした市民大学のひとつである。「徳島をもっと元気にしたい」という仲間が集まってNPOをつくり、講師を招いた座学だけではなく、野外に飛び出しての活動など地域の人びとを巻き込んだ「学び」を展開している。現在では、地域の課題を解決するための活動に取り組んでいる。びざん大学の活動について、理事長の長谷川晋理さんとその仲間の方たちにお話をうかがった。**

## 地域活動参加促進のポイント

- 「徳島を元気にしたい」という思いが出発点。誰もが先生として教壇に立ち、興味あること、やりたいことを講座として立ち上げ、実行できる。
- さまざまな人とつながることで、自然と地域の活動と結びつく。
- コミュニティFMのラジオ番組を通じて地域に情報を発信している。

〈地域活動に参加した方たちの声〉

- 自分の体験がひとつの企画となり、それが現在の仕事や地域活動に結びついている。
- 横のつながりがなかったり、世代間のつながりのない団体が多いなかで、びざん大学は活動テーマが無限につくれ、興味がある人なら誰もが関われる。

## ある人物との出会いを機に、びざん大学を設立

「びざん大学」設立の中心メンバーである理事長の長谷川晋理さんは、大阪市出身で、東京の経営コンサルタントの会社に就職した。その後、退職し、母親の出身地である徳島市に移り住んだ。母親と弟が徳島市内で経営する雑貨店の手伝いをしていたが、そこで見たのはシャッター通りの寂しい風景だった。

「いずれ徳島を離れよう」と思っていた長谷川さんの意識を変えたのは、徳島の代名詞でもある阿波踊りだ。圧倒的な迫力で迫ってくる踊りの波と大勢の観客の熱気に「阿波踊りがある徳島はすごい！」と衝撃を受けたという。そこから徳島をもっと活性化させたいと思うようになり、自分で飲食店を経営する一方、商店街の活動にも積極的に関わるようになった。「商店街の集まりで出会ったのが、『新町川を守る会』会長の中村英雄さんです。中村さんとの出会いがきっかけで、びざん大学をスタートすることにしたのです」と長谷川さん。

「新町川を守る会」は1990年に発足したNPOで、中村さんを中心に毎月2回、ボートで新町川の掃除をしたことが会の始まりだという。今では、ひょうたん島と呼ばれる中州の周辺の川の掃除と、そこから派生したひょうたん島周遊船をボランティアと運航したり、寒中水泳大会をしたりと、さまざまな地域活動の企画を立ち上げている。2014年からは年に3回、「とくしま　まちなか花ロードPROJECT」を徳島市との共催で実施している。東西約1.5km、南北約700mの国道沿いに花を植えるイベントには300人を超える大勢の市民も参加し、今では恒例行

びざん大学理事長の長谷川晋理さん。「阿波踊りがある徳島はすごい！」と衝撃を受け、徳島をもっと活性化させたいと思ったという。

事となっている。

「最初は中村さんに呼ばれて新町川の掃除をしたり、国道沿いの花の水やりをしたり、よく分からないままに活動に参加していたのですが、『新町川を守る会』を通して徐々にNPOとはどういうものかを知るようになりました。『新町川を守る会』のボランティアの大半は平日も遊覧船を運行していることから60歳以上で、船舶免許を持っている人が多い。でも、船舶免許を持っている人は少ないし、働いていて時間に余裕がない人は活動に関わることが難かしい。そこで、中村さんたちが川を中心に活動しているのなら、私たちは陸を中心に活動しようと思ったわけです」

そうした経緯を経て、2011年夏に発足したのが「びざん大学」である。びざん大学の「びざん」は、徳島市の中心部からすぐのところに位置する眉山に由来する。「眉山から見えるところがキャンパス。徳島の街を舞台に学ぶことを通して、いろいろな仲間との出会いを楽しむ」が、びざん大学のモットーだ。

## 多種多様な講座で、地域の活性化を目指す

びざん大学では、誰もが先生となって教壇に立ち、専門的な知識や日常の知恵、新しい発想など、幅広いテーマで講座を開催している。商店街や図書館、博物館、駅、お城、ライブハウス、百貨店など、あらゆるところを学び舎とする。まさに地域密着型のコミュニティとして機能しているのだ。

これまでに行った講座は数多くあるが、ユニークなものでは「目指せ トイレの神様！」という講座がある。毎月1回、公衆トイレの便器を掃除するという講座だが、掃除の仕方は参加者次第。どこまで磨くのか、自分自身で決める。最初は手袋をはめて掃除していた人が、いつしか素手で便器を磨くようになることもあった。また、「そうだ、献血に行こう！」講座は、家族が貧血で入院し、輸血してもらったという経験の持ち主が発案。献血ルームに集合し、一緒に献血するという講座だが、講座をきっかけに顔見知りになり、他の活動にも参加するようなつながりができた人もいる。

こうした講座のなかでも、長谷川さんが特に重点的に取り組んだのが「徳島ひょうたん島博覧会プログラム：ダンボールで和船『千山丸』をつくろう！」である。活動の発端は、びざん大学が徳島市主催の「ひょうたん島博覧会」委員会のメンバーに選ばれ、水辺で実施するイベントの企画を任されたことにある。なにをやったらいいのかと考えあぐねていた長谷川さんに、「新町川を守る会」のメンバーの一人が「博物館に飾ってある古い和船を川に浮かべたらどうだ」と冗談半分で言ったことが、企画のヒントとなった。

3歳から93歳までの延べ40人ほどの市民が力を合わせ、長さ6m、幅2mの和船をダンボールで造り、船体の模様も忠実に再現した。

完成したダンボール千山丸。進水式では、博物館から借りた甲冑を着た子ども一人と大人一人がダンボール千山丸に乗り込んだ。

「調べてみると、千山丸は江戸時代の徳島藩主専用の御召船で、国内で現存する唯一の藩政時代の和船として国指定重要文化財にも指定されています。そうした千山丸の価値が専門家の調査で分かって博物館に収蔵されたわけですが、それまではずっと公園の掘っ立て小屋に放置されていたものですから、徳島市民には単なる古い船というイメージしかないんです。『こんなすばらしいお宝を放っておく手はない！』と思いました。それで、市民に呼びかけてダンボールでレプリカをつくって実際に川に浮かべ、みんなに見てもらうことで千山丸の価値を再認識する活動にしようと考えました」

計4回のワークショップには、3歳から93歳までの延べ40人ほどの市民が参加。本物の約5分の3にあたる長さ6m、幅2mの和船を造り、千山丸の船体に施されていた団扇の模様も忠実に再現した。進水式には、博物館から借りた甲冑を着た子ども一人と大人一人がダンボールの和船に乗り、大いに盛り上がったという。

## サンタになって、入院している子どもたちにプレゼントを届ける

バルーンアートのお店を開くとともに、バルーンを使ったボランティア活動にも取り組む山下さん。「子どもたちに喜んでもらいたい」が出発点だった。

びざん大学で2012年12月からスタートしたのが「家にサンタがやってくる！」である。

「親御さんから事前にプレゼントを受け取り、クリスマスの日にサンタとトナカイの格好をしたボランティアが子どもたちにプレゼントを届けるという活動です。新聞社に話を持っていったら記事にしてくれて、約30組の親御さんから依頼がありました。日中はそれぞれ仕事を持っているびざん大学のメンバーに代わり、徳島市のNPO支援センターが依頼の受付を引き受けてくれました」

初年度はまったく費用も受け取らずに行ったが、ガソリン代などもかかるため、翌年からは1家庭500円で受けることにした。とはいえ、もともと手弁当で講座を行うのがモットーであるため、集まったお金はそのままびざん大学に残していた。そんなとき、NPO支援センターの職員で、びざん大学の立ち上げ時から関わってきた山下陽子さんから「病院で長期入院している子どもたちにクリスマスのプレゼントを贈ったらどうだろう」と提案があった。以来、徳島大学病院の小児医療センターに入院している子どもたちに、サンタとトナカイがプレゼントを届ける活動も行っている。

発案者の山下さんは、中学生のころに長期の入院をした経験がある。「だから、病院にいる子どもたちの気持ちがよく分かるんです。そういう子どもたちにサンタさんがプレゼントを持っていったら、どんなに喜ぶだろうと思いました」と山下さん。

そんな山下さんは数年前、NPO支援センターの職員として小児科病棟を訪問する機会に恵まれた。入院している子どもたちに喜んでもらおうと当初は独学でバルーンアートを学び、その後バルーンアートへの道へ進んだ。現在は自身でバルーンアートとバルーンを活かした空間デザインなどを業務とするお店を開くと同時に、ボランティア活動として病院などを回っているという。

## さまざまな人とつながることで、自然と地域の活動と結びつく

前述の「とくしま　まちなか花ロードPROJECT」に、市民が参加するのは年3回のイベントのときだけだが、植えられた花を維持しているのはボランティアのメンバーだ。「新町川を守る会」とびざん大学のメンバーを中心に毎日水やりを行っており、長谷川さんの日課にもなっている。

「国道沿いのお店や会社などに頼んでバケツに水をもらい、それを花壇まで運んで水やりをするので午前中で2～3時間はかかります。会社勤めの人だけではとてもできないので、地元の大学生や外国人ボランティア、春休みや夏休みに県外から来てくれる大学生にも手伝ってもらっています。

外国人をびざん大学に呼ぶようになったのは、日本でボランティア活動をしながら住民と交流したい外国人がいると知ったからです。2015年に日本国際ワークキャンプセンター（東京）のサイトで参加を呼びかけてもらったところ、40代の米国人男性を始めとしてロシア、チェコ、イタリア、ドイツ、フランスなど、世界中から徳島にやってきてくれました。現在はびざん大学がシェアハウスを借りて住んでもらっています。その費用は、街のイベントでかき氷の屋台を出したり、餅つきをしたりして、自分たちで捻出しています」

国道沿いの花の世話は、びざん大学の日課。作業をしていると多くの市民が「いつもありがとう」などと声をかけてくれるという。

作業にあたったみんなで記念撮影。この日も県内外の大学生や外国人ボランティアなど10名が花の世話に精を出した。

現在、びざん大学が定期的に行っているボランティア活動としては、花壇の水やりの他、アニマルシェルター「HEART徳島」が保護した犬猫の世話、子どもたちと外国人の交流を目的とした学校訪問、農業の集落支援などがある。

「アニマルシェルターを運営しているのは、徳島在住10年以上のカナダ人です。びざん大学に外国人ボランティアがいるというのと、私自身がそこの保護犬の里親になったという縁から手伝うようになりました。また、私には子どもはいませんが、小学校の登下校の見守りもしています。このようにさまざまな人とつながることで、自然と地域の活動と結びつくのです。外国人ボランティアは保育園や小学校、児童館の子どもたちとの交流を図るだけでなく、英語を教えたり、草取りをしたりと相手がしてほしいという活動はできるだけ行うようにしています。児童館では月に1回、子ども食堂を開いて外国の料理を振る舞ったりもしています」と長谷川さん。

捨てられたり虐待を受けた動物たちの保護や里親探しを行っている「HEART徳島」。ボランティアたちは動物たちの世話にあたる。

「エフエムびざん」で発信しているラジオ番組の収録風景。徳島の魅力を英語やフランス語、ロシア語などさまざまな言語で発信している。

## 子どもたちが戻ってきたいと思える徳島にしていくために

さらに、人と人とのつながりではじまったものに、コミュニティFMのラジオ番組がある。そもそもは関西などでラジオ番組の仕事をしていた瀬戸恵深さんに、「びざん大学でラジオドラマの講師をやってくれないか」と頼んだのが発端だ。その後、徳島に戻ってきて「エフエムびざん」のディレクターになった瀬戸さんが長谷川さんに声をかけ、「エフエムびざん」で外国人ボランティアによる生放送をすることになったのだという。瀬戸さんは、「進行役もゲストも外国人ボランティアで、メンバーも固定ではなく毎回入れ替わりです。はじめて日本に来た外国人ボランティアに徳島の印象などを話してもらったり、徳島在住の外国人をゲストに呼んだりして、もう2年以上続いています。徳島の魅力を英語やフランス語、ロシア語などさまざまな言語で発信するのはとても面白いし、意味のあることだと思います。徳島にはいろいろな団体がありますが、横のつながりがなかったり、世代で断絶していたりしています。その点、びざん大学はテーマが無限につくれ、関わろうと思ったら誰もが関わることができる。そこが大きな特長だと思います」と語ってくれた。

「エフエムびざん」のディレクターで、びざん大学と長いつき合いのある瀬戸さんは、「びざん大学はテーマが無限にある」と語る。

「徳島をもっと元気にしたい」という思いから出発し、現在では地域のさまざまな課題に直接向き合い、課題解決に向けて知恵を絞り、汗を流すびざん大学。そうした活動を通して、どんな街をつくっていきたいと考えているのだろうか。「子どもたちが進学や就職で徳島を離れても、いつか再び戻ってきたいと思える徳島にしていきたいです。それには、なによりも多様な学びの機会をつくり出すことが大事だと思います。例えば、外国人ボランティアの力を活かすことで、小学校に6年通ったら英語を話せるようになるとか、プログラミングができるようになるとか、子どもたちが徳島を離れ県外で活躍するときに役立つ武器をたくさん渡してあげたい。それが子どもたちにとっては故郷に対する誇りや愛着になると思うのです」と長谷川さん。

子どもたちが再び戻ってきたいと思える徳島にしていくために、びざん大学のメンバーはこれからも多様な活動を生み出しながら地域の課題に本気で向き合っていく。

びざん大学WEBサイト▶